論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　　教育学　　）	氏名	伊藤　優
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

保育所における連絡帳を通した連携に関する研究
―食事に焦点を当てて―

論文審査担当者

主　　査	教授	七木田　敦
審査委員	教授	丸山　恭司
審査委員	教授	山田　浩之
審査委員	准教授	中坪　史典

〔論文審査の要旨〕

本論文は、食事に焦点を当てた連絡帳での保育士と保護者のやりとりを検討することによって、保育士が保護者と連携して子どもに支援する様相を明らかにすることを目的としている。

序章では、保育所における保育士と保護者の連携や、連絡帳に関する先行研究を検討することで、先行研究の課題と本研究の目的を提示した。保育士と保護者の連携に関する先行研究から、保育所における保育士と保護者の連携の必要性や重要性が指摘されている。一方で、保育所を利用する保護者は共働きであり、時間的・精神的余裕を持ちにくいため、保育士が保護者と連携して子どもに支援することが困難な現状が存在する。その中で、保育士と保護者をつなげるものとして、連絡帳が重要な役割を担っている。連絡帳に関する先行研究を概観し、課題を明示することで、本研究の視点や目的を示す。

第一章では、乳幼児の食事に関する概念及び問題の背景、保育士が食事に関して保護者と連携して子どもに支援する必要性や課題について検討した。先行研究から、保育所の給食場面における保育士の支援に対する期待が高まる一方で、多くの保育士が保育所だけで子どもを支援することに困難を抱えていることが示された。さらに、連絡帳の記述内容の中で食事に焦点を当てることの必要性や利点を明示した。

第二章では、保育士へのインタビュー調査から、本研究で対象とする「食事の連絡帳」の概要及びそれを用いるようになった経緯、活用方法について示した。また、保育士と保護者の「食事の連絡帳」に対する意識について、インタビュー調査及び質問紙調査を実施し、保育士と保護者が相互に子どもに関する情報を交換することによって、保育士は保育所での子どもへの支援に生かしていた。また、保護者は「食事の連絡帳」の効果や必要性を感じており、保育士が「食事の連絡帳」を通して子どもの園での様子を詳しく伝えることで、保護者の連絡帳を記述する際の負担感や子どもの食事に関する保護者の悩みに影響を与える可能性が示唆された。さらに、本研究の方法について言及した。本研究では、子どもの食事に悩みを持つ保護者と悩みを持たない保護者に分け、観察や保育士へのインタビュー及び連絡帳の記述から、子どもの食事の変容を明示した上で、それに伴う「食事の

連絡帳」での保育士と保護者のやりとりを検討した。なお、「食事の連絡帳」での保育士と保護者のやりとりを検討する際は、分析枠組みとして、ハーバーマスの相互行為の発達段階論を用い検討した。

第三章では、子どもの食事に悩みを持つ保護者(２事例)に対して、保育士が「食事の連絡帳」を用いて連携して子どもに支援する一連の過程が、保護者と子どもに与える影響を検討した。その結果、子どもの食事に関する不安が強い保護者に対して、保育士が「食事の連絡帳」を通して子どもの食事量や食事内容の変容に気づかせることが、保護者に子育てに対する安心感を与え、子育てのストレス軽減に繋がることを明示した。

第四章では、保育士が子どもの食事に悩みを持たない保護者(３事例)と「食事の連絡帳」を用いて連携して子どもに支援する一連の過程が、保護者と子どもにどのような影響を与えるのかを検討した。その結果、保育士は連絡帳を用いることで、子どもの食事を保育所に一任する傾向の強い保護者が子どもと向き合い、触れ合う場を強制的に作り出しており、このことが親としての自覚を醸成することにつながっていた。一方で、食事に焦点を当てた連絡帳を用いた連携の課題として、保育士が保護者の状況に応じて記述を工夫しなければ、保護者に継続した記述を促せないだけでなく、時間的・精神的に余裕を持ちにくい保護者に過度なプレッシャーを与える危険性が示された。

第五章の総合考察では、本研究で得られた知見として、以下のことが明らかとなった。第一に、保育士が保護者と連携して子どもに支援する際、保育士と保護者及び子どもがそれぞれ影響し合いながら変容している過程を明らかにした。第二に、子育て支援に対する連絡帳の位置づけ及びその効果をもたらした連絡帳の特性を明示した。第三に、保育士が保護者と連携する際の食事の特性を示した。

本研究は、以下の点において評価することができる。

第一に、保育士と保護者の関係性の変容に加え、子どもの変容も捉えながら、連絡帳における保育士と保護者及び子どもの三者の関係性の変容を明らかにした。これらを明らかにしたことによって、保育士と保護者の連携した子どもへの支援は、子どもの行動の変容や保護者の子どもの捉え方や考え方の変容に伴い、柔軟に変容しうるものであることが示された。

第二に、保育士と保護者の連絡帳を通した連携を子育て支援の視点も含めながら検討した点が挙げられる。連絡帳での保護者との情報交換が、子育て支援や保護者支援にもつながる様相を示したことは、保育士が保育所を利用する時間的余裕を持ちにくい保護者と連携する際の連絡帳の新たな活用の可能性につながる知見になり得る。

第三に、保育士が連絡帳を用いて保護者と連携する様相を食事に焦点を当てて検討した点が挙げられる。食事に焦点を当てることで、保護者は自身の支援で子どもが変容したという達成感を持ちやすく、保育士は連絡帳を通して、保護者の子育てに対する意欲を喚起させることが可能となっていた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成２８年２月１２日